

「ものづくり考古学」

大田区立郷土博物館 編

本書のサブタイトルは「原始・古代の人々の知恵と工夫への誘い」となっている。これからも明らかなように、全国各地の遺跡から発見された出土品をもとに、原始・古代における「ものづくり」を通して、往時の人々の創造性を推察したものである。

遺跡からは、当時の人々が使った完成品ばかりではなく、その原材料、製作途上の未完成品、製作用の道具類、さらには、工房や付属施設など製作にかかわる遺構なども数多く発見されている。本書ではそれらを写真で紹介するとともに、その作品の製作工程を推察している。そして、その中から、いわゆる「もの」を作ることに関わった多くの人々が、さまざまなことを考え、それを踏まえて生き生きと活動する姿までが見えてくるように記述してある。

これは、個々の遺跡に残された人々の意図的な痕跡には「私たち人類の生活における知恵と工夫の歴史を概観する」という、考古学本来の目的に沿った観点のほかに、工業人としての観点からの「ものづくり」を通じたアプローチも可能になるように編集されている。

本書は、写真や絵図を多用して解説されており、気軽に楽しむことが出来るようになっている。その分類も、石器、玉、土器、埴輪、漆、赤彩、アスファルト、編物・織物、骨角器、木器、鑄造となっている。後半は、原始・古代における「ものづくり」に関する講演会の内容が記載しており、各編とも、興味深く読むことが出来る。内容は「原始・古代の人々の知恵」（西岡秀雄）、「考古学からみた技術」（潮見浩）、「石器製作の方法」（織笠

昭）、「木製品の製作技術」（山田昌久）、「玉造とその流通」（寺村光春）、「金属器製作の復元」（松村恵司）となっている。

例えば、玉（たま）の項では、美しい光沢があり希少性のある特殊な材料で作られ、装身具を構成する製品及びその材料のことであるとし、その材料としては、初期においては入手しやすい木の実・骨・角・牙・貝・土等が利用されたが、装飾的美感を得るため、動物質の真珠・珊瑚・象牙等、植物質の琥珀等が、そして、最も利用されたのは鉱物質の硬玉（翡翠）・軟玉・碧玉・瑪瑙・水晶・玉髓等である。また、人工物の金・銀・ガラス等が用いられたとし、玉造と攻玉に分け、攻玉では原石の入手、原石の加工、形成、整形、研磨、穿孔、仕上げ研磨に分けて解説してある。また、当時の製作工程や工具についても写真や絵図を使って説明が行われており、興味深く読むことが出来る。

また、当時の鑄造については、石や粘土で作られた鑄型に金属（青銅や鉄）やガラスを溶かして流し込み、さまざまな道具を作ることとし、ガラス製小玉とガラス製勾玉の製作工程や銅鐸の製造工程などが紹介されている。中でも、ガラス製小玉の切断技法や巻きつけ技法、さらには鑄造技法などは、バーナーがあれば試みたくなる記述となっている。

人々は過去の歴史の中から、さまざまなことを学ぶ。それは、過去における抗争などからの平和の在り方であったり、発達した今日の科学技術への進歩の過程であったりもする。とりわけ、工業技術は過去からの積み重ねの上に現在の技術があるとも言われ、先人の「ものづくり」に対する知恵と工夫を垣間見することも創造性の育成につながると思う。

（東京美術、277頁、4,200円）（毛利昭）